

県内避難者 交流通じ絆

東日本大震災や福島第1原発事故によって県内各地で避難生活を送っている12家族39人が、23～25日に伊豆市などで開催中の被災者支援ツアーに参加して交流を深めている。横のつながりのなかった県内避難者のネットワーク化に向けた一歩として、参加者は苦しい胸の内や悩みを共有し、「同じ境遇の人と話をして安心できる」と笑顔顔を浮かべる。

GW三島の支援ツアーに12家族



悩みや情報 共有の場に

グラウンドワーク(Gア)の第7弾。これまで三島が主催する「心では東北の被災地から県を元気にするショートツ」内に招待していたが、今

回初めて県内避難者を対象に開催した。

福島や宮城から避難し、湖西、浜松、富士、裾野市などで暮らす被災者が参加した。24日は自然体験や観光などを通して避難生活の疲れを癒やすとともに、支援情報の不足や被災地を往復する交通費の問題、仕事のため夫だけが被災地に残る「逆単身赴任」の状況などを打ち明け合った。

原発20km圏内の福島県檜葉町に自宅があつて、現在は湖西市で暮らす松本マリさん(32)は「ばら

バーベキューを通して交流を深めた県内で暮らす震災避難者」伊豆市の天城ふるさと広場

ばらに避難したため同じ境遇の人が近くにいっても知らず、情報がほとんどなかった。福島を知る人と交流できてほっとしたと喜んだ。福島県いわき市から湖西市に避難した木村みな子さん(48)は「避難者同士でないと分かち合えない思いや共通の不安がある。連絡を取り合い、同じ避難地域で情報を共有したい」と語った。

GW三島は11月以降、静岡県内で暮らす避難者のツアーを従来のツアーと並行して開く方針。渡辺豊博事務局長は「被災地ばかりに目が向いて足元がおざなりになってきた。今後は参加者をネットワーク化し、課題解決

のため調整できるようにしたい」と指摘する。

県が把握する県内の避難者は15日現在で1417人。福島県から約3分の2を占める。